

ミリアム・シルバーバーグに捧げる詩

フレッド・ノートヘルファー

ミリアム、私達は今日、あなたの一生を祝福するためにここにつどい、
あなたが私達に与えてくれたものに対し
心から感謝の意を捧げます。
あなたは、まさに思考の宝箱でした。
凡人には測り知れない近代日本の「エロ・グロ・ナンセンス」を理解しようと、飛び込んだあなた

きらきらと輝くあなたの眼を通して
私達はそれを理解することができました。

「内」と「外」は同じではありません。

「歌」は常に「替え歌」です。

あなたはこのことをよく理解していました。

マルクス主義者の作家詩人であった中野重治に始まり

カフェの女給とモガとお酒をくみかわし

資生堂のくり広げたお姫様文化を堪能し

彼女たちと共に せまりくるファシズムに抵抗したミリアム

あなたはそこでひかり輝いていましたね。

「愛」と「革命」を追い求め、

あなたはついに「日本」を脱出し、

民族と文化が、まるでハゲタカのように飛び回る

日本帝国の植民地に躍り出ました。

そして私達を近代の新たな考えに導いてくれました。

あなたは、まるで「モガ」が「ヨガ」をやるかのような離れ業を見せてくれたのです。

でもあなたは決して日本を離れることはなかった。

日本とその社会の人々に対する造詣と愛情を常に持ち続けた。

日本研究センター、歴史学部、そしてカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校に属する

私達一同は何と多くの恩恵をあなたから受けていることでしょう。

ありがとう ミリアム そしてさようなら。

私達はあなたが運んでくれた太陽のさんさんとふりそそぐ 雲ひとつない青空の日々と、
あなたのいつも笑っている眼を語り続けるでしょう。

あなたの今いる世界も光輝くように。

でももし雨が降るようなことがあれば

あなたが歌ってくれた「歌」を見い出してください。

私達にできることはあなたの歌に合わせて

演奏することなのです。

(この詩は2008年10月3日のミリアム・シルバーバーグ教授の追悼会の際に玉野井麻利子
子が朗読した。日本語訳は玉野井麻利子)